大阪・関西万博、いよいよ開幕

「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマにした2025年国際博覧会（大阪・関西万博、運営主体・日本国際博覧会協会）が13日、人工島・夢洲（大阪市此花区）に開幕した。日本での開催は2005年の愛知万博以来で、20年ぶりとなる。10月13日までの期間、世界が一つの場に集い、先端技術を駆使した映像体験で来場者を楽しませる。

提供・公益財団法人2025年日本国際博覧会協会、大林組、撮影・伸和

「いのち」テーマに184日間

今回の万博には約160カ国・地域と7国際機関が参加し、期間中、約2820万人の来場を見込んでいる。外国人も多数来場しそうで、日本の魅力をアピールする格好の場となりそうだ。

一方で、いま一つ盛り上がらず、万博来場意向に関するアンケート（昨年12月、6千人対象）では「行きたい」「どちらかといえば行きたい」と答えた人は約35%にとどまっている。「ゴールデンウイークや夏休みに入ると来場者も増え、口コミで魅力が発信されれば盛り上がるのでは」という見方もある。

世界最大級の火星の隕石や、人工多能性幹細胞（iPS細胞）から作った小さな「心臓」（直径約3・5ミリ）の展示など見どころも多い。半面、期待された「空飛ぶクルマ」は、当初来場者が搭乗する商用運航が検討されていたが、結局デモ飛行に切り替わった。また、気象状況や機体のメンテナンスなどで運休となることも想定されており、来場者が未来の移動手段を目にする機会は限定的になりそうだ。

海外館の建設遅れ、チケットの事前予約が面倒、会場のアクセスが悪い、食事が高額、宿がとれない―など、批判や諦めの声も少なくない。「これも万博」と前向きに捉えたいところだが…。

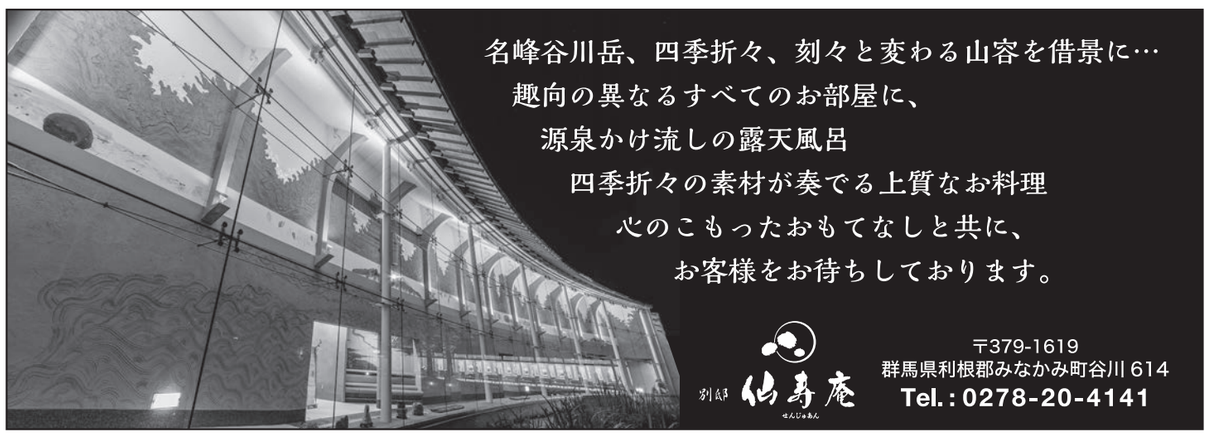
海外からの来場者には、日本の各地に足を運んでほしいものだ。万博は始まったばかり。どう誘導し、地域の魅力に触れてもらうか、観光業界の手腕が問われる。

大屋根リング

今回の万博のシンボルといえるのが、世界最大級の木造建築物「大屋根リング」。1周2キロのリングは直径675メートル。東京スカイツリー（634メートル）を横にしたくらいの長さで、高さは内側が12メートル、外側が20メートル、幅30メートルある。リングの中は3区画に分けられ、参加国（約160カ国・地域）のパビリオンが集まっている。

最寄り駅となる大阪メトロ中央線「夢洲駅」

「夢洲駅」構内にあるオールジェンダートイレ

万博はテクノロジーの進化を披露する場ともなるが、1970年の大阪万博の「サンヨー館」で注目を集めた「人間洗濯機」がアップデートされ、再び登場した。

展示したのは大阪市のサイエンス社で、「ミライ人間洗濯機」として大阪ヘルスケアパビリオンで見られる。1人用で、卵のような形が特徴。泡で洗浄され、上からシャワーもかけられる。第1号入浴者は大阪府の吉村洋文知事で「めちゃめちゃ気持ちいい」とさっぱりした様子で語った。